

和 算 漫 錄 (三)

村 林 專 之 助

1. 我が國の算學は、遠く王朝時代已に大學の教科書として、孫子九章・五曹・海島・三開・周髀其の他の算經（當時算學は算道として重んぜられ、其の書籍は何々算經と云はれたのであります。丁度詩經・易經など云ふのと同じわけなのです）を採用したのですが、之れ等の書籍の内には、簡易なる理論及び應用を記述したるもの、又は相當高等の程度のものあり、或は又主として測量天文等に屬するものもありて、何れも隋唐以前又は隋唐等の書籍より取捨採擇したるものでありませうが、上代已に之等の書籍を採擇して教科書としたるは、實に豪華なるものであつたと思ひます。後年我が數學はますます發達して、西洋のそれに比肩し得べき程度になり、遂に我が數學力は、維新回天の偉業の原動力となりたるのも、また宜なる哉と云ひたいのであります。

2. 開平方及び開立方の運算法は、上代より江戸時代の初期ぐらゐまで、すべて今日の筆算の開き方と同一であります。珠算の運算では開平を半九九を用ひて開くやうになり、筆算とは少しく異つた運算法を用ひたのは、まことに面白いことです。さうして筆算よりは簡便に運算を爲し得らるゝことは、實用速算上喜ばしきことではありませんか。兎に角開平でも開立でも、珠算獨特の運算法で速く出來てゆくから愉快であります。たゞ、開平半九九を用ゐる運算を、誰れが考案したるか、又其の年代は江戸時代の中頃位のことであるか等のことは

私には未ばよく分らないので、残念に思つてゐる次第です。何れ尙ほよく調べたいと思ひますが、自然御存知の方は御教示を願ひたいのであります。

3. 乗除（減一乘法其の他の算法を除く）の普通定位法に於て、乗算ならば法整數のとき、實一位の桁より法の桁数だけ下へ數へ、更になほ一と桁下の桁を答數の一位とし、又は初めより法の桁数に一と桁加へ、同じく實一位より此の桁数だけ下へ數へたる桁を、答數の一位とする位取法も行はれてをります。除算ならば前記の逆に上へ數へるのですが、（法小數又は帶小數の場合を省く）全體實の單位を右又は左へ移すのですから、これは法の桁数丈け、實一位の次の桁から數へて、右でも左でも一位を移す方が、稍簡便で且つ理窟にも合つてゐるかと思ひます。珠算研究者及び實際教授に當つてゐらるゝ方の御意見を伺ひたいのであります。

4. 質屋の看板 柳亭種彦編「用捨箱」に、昔は質屋に看板あり。將棋の駒の形したる板を紐にて釣り、その板の上に質札の反古を、紙の塵はたきの如く束ねたる物なり。其板をかくる事止みて後は、彼塵はたきめきたる物とのみなれり。是は京師には今もありと聞けり。夫故やらん、近きかな草紙の畫にもをりをり見ゆれど、板札をかきたるは稀なり。或人の曰く、昔は謎語のやうな看板おほくあり。將棋の駒の形なるは、金になる。金銀にかへるなどいふ意ならん歟と。京都板の色子みたごに圖あるを見れば、此看板江戸にかざりしにはあらず。〔畫卷〕は

看板圖
の 一



紙を下へついたり軒へひきく釣たる故、出入人に天窓うたせじとの用心歟。質札の反古にはなきさまにて、胡粉にて白く隈どりたり。他國には今も質屋の看板種々あり。以下略す。
初冬にしたしみのある火桶かな